

「ここは・・・」

銀の髪の少女・・・リンネ・アテナは美しい草原で目を覚ました。

「たしか、アロンダイトに負けて・・・」

「そうさ、君たちは“少し”本気になったアロンダイトにぼろ負けしたのさ」

「そう・・・あれで本気じゃないか・・・私もまだまだね」

落ち込むリンネ、そしてそれを見て笑う少女の声。

「それで、ここは？そしてあなたは？」リンネは顔を上げ声の主を見上げる。

そこに飛んでいたのは、一匹の妖精だった。

「ここは、妖精郷アヴァロン。そして、僕はモルガン・ル・フェイ。モルガンでいいよ！」

「アヴァロン・・・そうか、ここがそうなのね・・・」

リンネは聞いたことだけはあった。

彼女が生まれた霧の森。その護り手たるドルイド・・・その中でも高位の存在が神の戦士となるため、異世界へゆく・・・そんな伝説が伝わっていたからだ。

「知ってるなら話は早いね。あの戦い・・・確かにぼろ負けだったけど、高位の神喚者（ヴァリス）であるアロンダイトとあそこまで戦えたことが評価されてね、『試験を受けさせよう』っていう話になったんだよ。あ、他の二人も違う場所で試験を受けているよ。」

「ほんと！？」リンネの顔に驚きが浮かんだ。

「ああ、ほんとだよ・・・でも・・・」

その瞬間、殺気が膨れ上がった。

「今回はお情けの試験だからね・・・厳しいみたいだよ」そういうと妖精は逃げるように離れていく。

「そう・・・みたいね」

そして、殺気は空間を割り、一匹の魔獣が飛び出してきた。

今までに見たことのない、瘴気をまとった巨躯の獣が・・・

「フレイム・・・クラック！！」ダンダン

いつも通り、先手で放たれた2種の魔弾（スペルバレット・フェイント付）。着弾をした瞬間、破壊をまき散らすはずの一撃は

『GYAAA！！！！』

その咆哮と共に噛み砕かれた。

（魔法を吸収とか・・・どんだけ相性悪いのよ・・・でも・・・）

リンネはすでに2回の攻撃を加えていた。だが、そのどちらも噛み砕かれた。

（仮説は一個できたけど・・・）肉体能力の低い魔法使いが、今まで生きていることから分かるように魔獣はリンネをなめていた・・・ゆえに今のうちに対抗策を考えなければならぬのだが、情報はまだ足りなかった。そして・・・

「そんな悠長に考え事していいの？」

「え・・・しまっ・・・」

そんな余裕はもう与えられなかった。

気づけば、なぎ払われた魔獣の腕が目の前に迫っていた。

とっさに、キャリバーと黒刃の短剣(アブストキャリバーによるナイフパリティ)で押しとどめるが・・・それごとリンネは吹き飛ばされた。

「がふっ」吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたリンネは生きてはいた・・・が完全に致命傷と言えるダメージを受けていた。

「もう無理じゃないかな・・・今あきらめるなら、生きて帰れるよ」

「こいつは・・・どうすんのよ・・・」

「街の神喚者を一人連れてくればいいだけさ。こんなのただの害虫程度の相手だしね。」

立ち上がることもできないリンネのその言葉にモルガンは、簡単に言い放つ。

「言ってくれる・・・じゃあ私も逃げるわけにいかないわね」だから、リンネは笑い・・・

そして、銃身のゆがんだキャリバーを構え立ち上がる。

「なんで、そこまで意地を張るかなあ・・・」あきれた声で言う妖精・・・だが

「意地なんかじゃない・・・」

「え？」そう言って、血だらけになりながら浮かべたリンネの笑みに言葉を止めた。

「私は“最強”を目指しているの・・・だからそのためなら、命くらい賭けないとね」

「そうですか・・・じゃあ、倒して見せてください。」

妖精の怒ったような言葉とほぼ同時に、一陣の風が通り過ぎた。

それは、魔法使いのリンネの視覚では捉えることすら叶わない一撃。

ゆえに、その場にあるのは、魔獣の牙に串刺しされたリンネの姿だった。

~~~~

「この人もだめだったか・・・まあ、簡単に命を懸けるような人に興味は・・・あれ？」

「ようやく、近づいてきてくれた・・・」

魔獣から与えられた傷は、確実に致命傷だった。

だが、リンネの身に宿る竜の血(イモータルブラッド)は、リンネを死と紙一重の状態まで回帰させていた。

「あなたの・・・魔法吸収は“喰らう”ことでしょ？なら、この距離なら“喰う”暇はないんじゃないの？」

そう言って、リンネは魔獣の右眼に銃口を向ける。

その光景を見る魔獣の眼に浮かんだのは、驚愕と恐怖。魔獣はリンネを振り払い、逃げようとした・・・だが、

「遅い！フレイムクラック・・・フルパワー(リゼントメント)」

静かに放たれたその2発の魔法弾は、魔獣の右眼に吸い込まれるように消え・・・

絶叫が轟いた。

～～～

「す・・・すごい」妖精・・・モルガンの口をついて出た言葉は、さっきまでとは真逆の言葉だった。

リンネの命を懸ける言葉は・・・ただの意地とかではなく、ただ、勝つつもりだったことが分かったからだ。

「だけど・・・」モルガンは解った。“今”の彼女にできることはここまでだと。

どれだけ、“勝つ”という意思があろうとも、このままでは勝ち目はない。

だから、モルガンは最後の質問を投げかけた。

「リンネ、君は“最強”になりたいといったね」

「こふっ・・・死にかけの人に向かって何？嫌味？」振り払われ、たたきつけられ、腹に大穴をあけながらも、なんとかリンネは言葉を返す。

「それは、なぜだい？」

「なぜって・・・」

一瞬言葉が止まった。だが、笑いながらリンネは言い放った。

「そんなの、自分が大事なものを“守る”・・・そんな“わがまま”を貫くために決まってる」

「ははは、わかりやすい答えだね。でも・・・うん気に入った。認めよう、神喚者として」そのモルガンの言葉と共に、炎がリンネを包み込んだ。

「これは・・・」

「さあ、リンネ・・・あなたの“最強”の姿を私たちにを見せて」

「・・・最強か・・・いいわ見せてあげる。私の思い描く最強の私をね」

そして、炎は吹き散らされた。

～～～

片目を失った獣は怒りに震えていた。

矮小な人間・・・しかも、ただの人間が自らに与えた傷はひどく傷み、何より“魔を喰らう獣”である己に“魔”によって与えられた傷は恐怖は、魔獣のプライドを激しく傷つけたのだ。

すぐにでも、八つ裂きにし、絶望を与えたかったが。

だが、今その女は炎の中にいる。

もちろん、その炎ごと喰らうことも、切り裂くことも容易い・・・だが、それでは女は何も理解できぬまま死ぬことになる。

それが、獣には許せなかった。

だが、そんな考えは炎が吹き散らされた瞬間に消え去った。

その紅き戦女神の放つ魔力の濃さに。

~~~~

「ずいぶんとまあ、派手な格好だね」炎の中から出てきたリンネの姿を見て、モルガンは呆れたように言う。

「たしかに、思った以上ね」

炎をそのまま服にしたような、紅と赤と蒼がまじりあったドレス。

その色を映す銀色の髪を飾るサークレット。

そして、両の手を覆うのは黒薔薇の色をしたガントレットだった。

「さてと、それじゃあ・・・さっさと決着をつけましょうか」そう言って、リンネは魔獣に微笑みかけた。

この瞬間、リンネと魔獣は対等の位置に立った。

「炎蛇よ」そのつぶやきと共に生まれる、一匹の炎を纏った白蛇。

『グルル…』そして、魔獣は前傾姿勢を取った。

どちらも理解していた。次の一撃を受けたほうが死ぬことを。

そして、圧倒的に不利なのはリンネのほうだった。

たとえ、神喚者になろうとも、肉体そのものの強さは上がらない。魔術師ならばなおさらだ。

「あなた、運がいいんだからね…私が一人で戦うとか、普通ありえないんだから」だから、リンネは言葉を重ねる。敵の思考の幅を少しでも狭めるために・・・そして、勝つために。

(攻撃そのものは、どうあがいても見えない・・・だけど避けられないのとはちが・・・う！！)

前傾姿勢から放たれる突進は、先ほどよりも早く、鋭かった。だが・・・魔獣は宙を舞っていた。

「直線で突っ込んでくるなら、来るタイミングと場所さえわかれば避けられるのよ！」その一撃はあまりに鋭く・・・素直すぎた。

ゆえに、リンネの先読み（トリビアリスト）と脈々と受け継がれてきた魂の記憶（エンシェントソウル）はそのすべてを読み切った。

だが、魔獣もそれを理解した瞬間、突進の力をそのままジャンプ力に変えていた。

距離があれば、どんな魔法でも自分の力に変えられるからだ・・・だが、それすらもリンネの予想の範囲内だった。

「たしかに、魔を喰らいその身を癒すことをされたら私の負け・・・だけど、今のその眼で、正確に喰らうことが出来るかしら・・・勝負！！」

そして、リンネはその両手を砲身とするように上空の魔獣へ向ける。

生み出された炎蛇は力ある形を描き、その身に纏う炎の温度を上げる。(ファイアーン)

「この身は、すべてを燃やし尽くせし炎の砲身！放ちしは永劫に燃え続ける輪廻の化身！」

(人が一度に操ることが出来る魔力は多くない。だから、人は精霊の力を借り魔術を使う。ならそこに、概念を・・・“生命”という名の力を加えましょう)

リンネの心はらしくなく高揚していた。初めて使う・・・その“魔法”に。

「無限交差の炎蛇(ウロボロス・プロミネンス)！！燃やしつくせ！！！」

その身に満ちる“生命”という名の“力”(精霊王招来)を加え放たれたのは、自らの尾を飲み込む白く輝く炎の蛇。

その炎蛇は炎を循環し、その力を増幅させながら、降下してくる魔獣へ迫り・・・その身を焼き尽くした。

~~~~

(あー、死ねる・・・)

魔獣が消え青く広がった空を見上げながら、リンネは仰向けになりその空を見上げていた。

「まさか、魔法使いがあれを一人で倒すなんてね・・・」モルガンがあきれたようにリンネを覗き込んでいた。

「振ってきてのはそっちでしょうが・・・」

「うん。でもまあ無理だと思ってたし」

(・・・この野郎)さらっと、無謀な戦いに挑まされていたことが改めて分かり、殺意を覚える。

「でもまあ、勝てたんだからいいじゃない。」

「ぬぐぐ・・・」唸るリンネ。

「それで、君は神喚者になったわけですが・・・あなた達に使命を与えます。」そんなリンネを横に、急にモルガンは真剣な表情になる。

「使命ね・・・」“達”という言葉に、ルネスとレイアも試練を乗り越えたことに安堵しつつ、リンネはモルガンの言葉を待つ。

「君たちが攻略してる謎の島をさっさと攻略してほしいんだ！」

「え？」

「あれは、妖精郷へつながるバベルの塔さ。最上階にいる黒幕は妖精郷とエリンディルを連結させ、数をもって妖精郷へ攻め込もうとしてるのさ。だけど・・・」

「ああ、その階のボスを倒すと塔が低くなってたわね・・・でも、塔の上に船ができていたけど？」

「一応の策ってことだね。塔が高ければ妖精郷への道を開く時間が短くて済むし、直接行けるから戦力も送り込める・・・けど、君たちみたいなのに塔を攻略されても、妖精郷を攻める手段を確保したって感じだよ。」

「なるほど・・・つまり気にしなくていいと。」

「そういうこと。だからまあ・・・頑張る。」

そういって、モルガンは消えた。

「ちょっ・・・言いたいことだけ言って消えた!？」

「あ、他の人はここを北に進めば合流できるから。あと合流したらエリンディルへ帰る道もできるから安心してね」と思いきや、それだけ言ってまた消えた。

「・・・いくか」なんだか釈然としないものを感じつつ、リンネは歩き出すのだった・・・  
永遠に終わらない戦いの中へ

アリアンロッド2E リプレイ・ガチリターンへ戻る・・・

## 【エネミーデータ】

“魔を喰らう獣” レベル40 識別値：30

HP：500 MP：300 行動値：24 移動力：50m

筋力：99/33 器用：70/23 敏捷：30/10 知力：60/20

感知：42/14 精神：30/10 幸運：18/6 防御/魔防：30/10

攻撃【薙ぎ払い】対象：範囲（選択）命中 23+3D6 ダメージ 100+7D6

【餓王の牙】対象：単体 命中 23+4D6 ダメージ 120+【対象との距離m】+7D6

《特殊能力》

〈魔喰い〉リアクション

対象からの攻撃が魔法ダメージの時使用できる。命中判定を行い、相手の攻撃の命中判定を上回った場合、対象のダメージ分 HP と MP が回復する。

また、この効果は HP が 300 以上ある場合、射程：至近以外の攻撃に対してはすべて【絶対成功】となる。

この能力は【パワー】に対しても使用できる。

〈味見〉パッシブ

メイジ・アコライト系の PC に対し 2 ラウンドの間攻撃を仕掛けない。

ただし、ダメージを受けた場合はその瞬間から攻撃対象となる。

〈餓王の牙〉メジャー

このスキルを使用する場合、マイナーアクションは使用できない。

移動しながら対象に、物理攻撃を与える。その際、対象との【距離m】分ダメージが増える。

ただし、【移動距離-20m】÷5(切り上げ)分命中達成値は減少する。

また、対象に攻撃をよけられた場合、エンゲージから離脱し、【最大移動距離-移動距離】分移動することができる。

〈2回行動〉〈脚止め〉〈抵抗性：恐怖〉〈吹き飛ばし・6LV〉〈見切り〉

【ドロップ】

2～7 “魔を喰らう獣”の牙（30000G）

8～18 “魔を喰らう獣”の皮（40000G）

19～ “魔を喰らう獣”の口（60000G）

【説明】

妖精郷ではよく出没する、ネズミ程度の扱いなエネミー。

このエネミーについて<sup>ヴァリアンス</sup>“人”に尋ねると「完全無効化じゃないから楽勝」という言葉が返ってくる事でも有名・・・人外魔境が多すぎる。

ただし、新人神喚者を数多く殺しているのもこのエネミーであり、『初見殺し』とも言われている。

また、魔術師がソロで出会った場合は普通死ぬ。

そのため、町ではこのエネミーの生態についていたるところで詳しく知ることができる。

【オリジナルアイテム】

・魔を喰らいし外套 補助防具 重量8 防御+2 行動値-3

1度だけ魔法ダメージを完全に無効化する。使い捨て。

『“魔を喰らう獣”の口』と『30000G』を消費することで妖精郷で作成できるパワーアイテム。